

脳動脈瘤術後精神症状に対する高気圧酸素療法への応用

北岡憲一* 中川 翼** 阿部 弘**
佐藤正治*** 岩隈 勉****

はじめに

対象例は過去3年間に美唄労災病院はじめ脳外科3施設にて脳動脈瘤の直達手術を施行され術後精神症状が認められた99例の破裂脳動脈瘤例にOHPを施行した。対象例で最も多かった前交通動脈瘤に前大脳動脈瘤を加えて「AC群(グループ)」とし、それに対し必ずしも精神症状を呈しやすすくない内頸動脈瘤、中大脳動脈瘤、脳底動脈瘤を「非ACグループ」とした。OHP実施方法は多人数用高圧治療槽を用いて1日1回で2ATA、1時間の条件下で行った。OHPの急性効果の判定基準は前田らの前交通動脈瘤の精神症状の重症度分類を参考にして定めた。

成績

ACグループ中、精神症状のgradeが変化する程の明らかな効果が認められたのは30例中14例47%で一方非ACグループの19例のうち、明らかな効果が認められたのは19例中12例63%で有効性は高かった(表1)。

「AC群」「非AC群」ともOHP開始前の症状が軽い程OHPの急性効果が認められた。特に「AC群」ではOHPによる中等度改善例、著効例は、OHP前の症状が軽度であった9例中7例であり、症状が中等度では3/11が、重度では4/7が占めておりOHP前の症状の重篤度がOHPの急性

表1 OHPによる効果の総合判定

AC群 (30例)	著効	1例	} 14例 (47%)
	中等度改善	13	
	軽度改善	11	
	不変	5	
非AC群 (19例)	著効	2例	} 12例 (63%)
	中等度改善	10	
	軽度改善	4	
	不変	3	

効果と大いに関係していた(表2)。

症状別のOHPによる改善度を比較すると、「AC群」「非AC群」ともOHPの効果が良いのは、自発性欠如や見当識障害であり、特に「AC群」では見当識障害9例中9例ともOHPにより軽～中等度改善が認められ、また「非AC群」の夜間興奮の2例もOHPは著効及び有効であった。不変であった症状は無動性無言症であった。「AC群」「非AC群」ともOHPを術後1カ月までに開始した早期治療例が効果が最も期待できるが、1～3カ月間の例でもかなりの効果が期待できた。特に「非AC群」ではこの傾向が強かった。しかし、術後3カ月以上経てしまった例ではOHPの効果はほとんど期待できないと言えた。OHP施行回数では対象例の多い14回群は17例でそのうち著効例は2例11.7%で、中等度改善例は6例35.3%、軽度改善例は6例35.3%で、一方49例中23例と最多の対象例であった21回群では著効例は1例4.3%であるが中等度改善例は14例60.8%でありOHP開始前の症状の重篤度に影響を受けつつも明らかな改善が認められた例は多かった。OHP施行回数が7回群、28回群はともに対象

*美唄労災病院脳神経外科

**北海道大学脳神経外科

***市立小樽第2病院脳神経外科

****苫小牧市立総合病院脳神経外科

表2 術後精神症状の重篤度別の急性効果

OHP 開始時 の重篤度	AC 群				非 AC 群			
	著効	中等度 改善	軽度 改善	不変	著効	中等度 改善	軽度 改善	不変
軽症 (15例)		●●●●●●●●	●●			●●●●●●		●
中等度 (15例)		●●●	●●●●●●●●	●●	●●	●		
重症 (19例)	●	●●●	●●	●●●		●●●●	●●●●	●●
計 (49例)	1	13	11	5	2	10	4	3
	30例				19例			
	● = 1 case							

例が少数であったが両群とも著効は1例もなく改善を示したのも OHP 前は症状が軽度であった例のみであった。

考 察

脳動脈瘤の術後精神症状は自然経過にても比較的短期間に著しく軽減されると言われその意味から OHP の有効性の確認には OHP の未施行例（以下自然歴例と略す）との成績の対比が不可欠である。我々は群馬大学脳外科のデータを自然歴例に掲げさせて頂いた。前交通動脈瘤の精神症状と遠隔成績は、術後中等度以上の精神症状が認められた例では、遠隔成績において完全社会復帰が自然歴では36例中5例14%にすぎないが、OHP 例では19例中7例36.8%であり OHP 例の成績がすぐれていた。

ついで対象となる全脳動脈瘤で術後中等度以上の精神症状を認めた例の社会的予後をみると術後の精神症状の重篤度の高い例の社会的予後では、自然歴例29例では死亡5例、社会復帰10例、かなりの欠陥残存6例で結局多少の能率低下はあるが病前生活に復帰したのは8/29 (27.6%) にすぎなかったが、OHP 35例では病前生活復帰は17/35 (49.5%) であり、OHP 例の方が明らかに自然

歴例よりも優れた成績が認められた。

結 語

全脳動脈瘤の術後中等度以上の精神症状を呈した例では、OHP 例の方が自然歴例よりも遠隔成績が優れていたと言えた。この事は注目すべき事であり、さらに OHP 施行例の大部分が OHP 開始後1カ月以内の短期間に症状が改善した事も OHP の有効性を十分示していると思われ、以上の事より OHP は治療として有用であると考えられた。

【参 考 文 献】

- 1) 北岡憲一, 中川翼, 阿部弘ほか: 前交通動脈瘤術後精神症状に対する高圧酸素療法への応用. 北海道医誌58: 154-161, 1983
- 2) 北岡憲一, 中川翼, 阿部弘ら: 脳動脈瘤術後精神症状に対する高気圧酸素療法. 脳卒中(投稿中)
- 3) 中川翼, 木野本均, 馬淵正二ほか: 虚血性脳血管病変に対する高気圧酸素療法の意義—その有効性と限界—. 脳外10: 1067~1074, 1982
- 4) 中川翼: (総説)虚血脳, 脳外8: 409—422, 1980
- 5) 前田進, 大川匡子, 相羽正: 脳動脈瘤の精神症状—術前術後ならびに経時的観察による—, 臨床神経14: 1—9, 1974